

江戸初期の武家の茶陶

一松江城下の重臣屋敷地出土品一

松江歴史館が所在する松江城の東隣には、松江藩の重臣たちの屋敷が集中していた。

松江に城下町が完成してからそう遠くない時期の寛永5～10年(1628～1633)の内容が描かれた堀尾期松江城下町絵図によると、松江歴史館の敷地には、北側に堀尾采女(4,000石)、南側に堀尾右近(500石)の屋敷地の一部があったとみられる。

松江歴史館敷地内の発掘調査では、北側の重臣屋敷地から、江戸時代初期の池跡や客座敷と思われる大型礎石建物跡が見つかり、それにつながる渡り廊下や茶室の存在をうかがわせる石列や小型礎石建物跡も見つかった。池を鑑賞する庭園があり、客座敷とともに茶室もあった姿が想像できる。

発掘調査で出土した遺物などから、堀尾采女の父で松江開府の祖・堀尾吉晴の甥にあたる堀尾民部が屋敷地内にこの庭園を造ったと考えられている。

南側の重臣屋敷地からも、織部焼の茶碗、唐津焼や志野焼の向付といった江戸時代初期の茶陶が出土した。

江戸初期の松江城下に暮らした重臣たちは、茶の湯を嗜んでいたことが見て取れる。



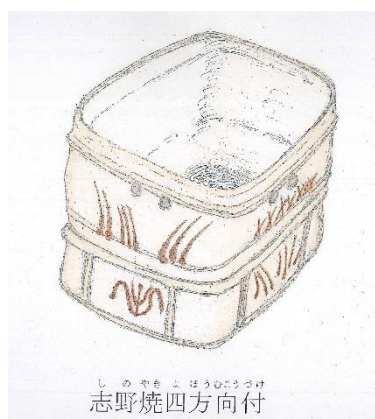
黒織部くつがた沓形茶碗



唐津焼よほう四方向付



志野焼四方向付

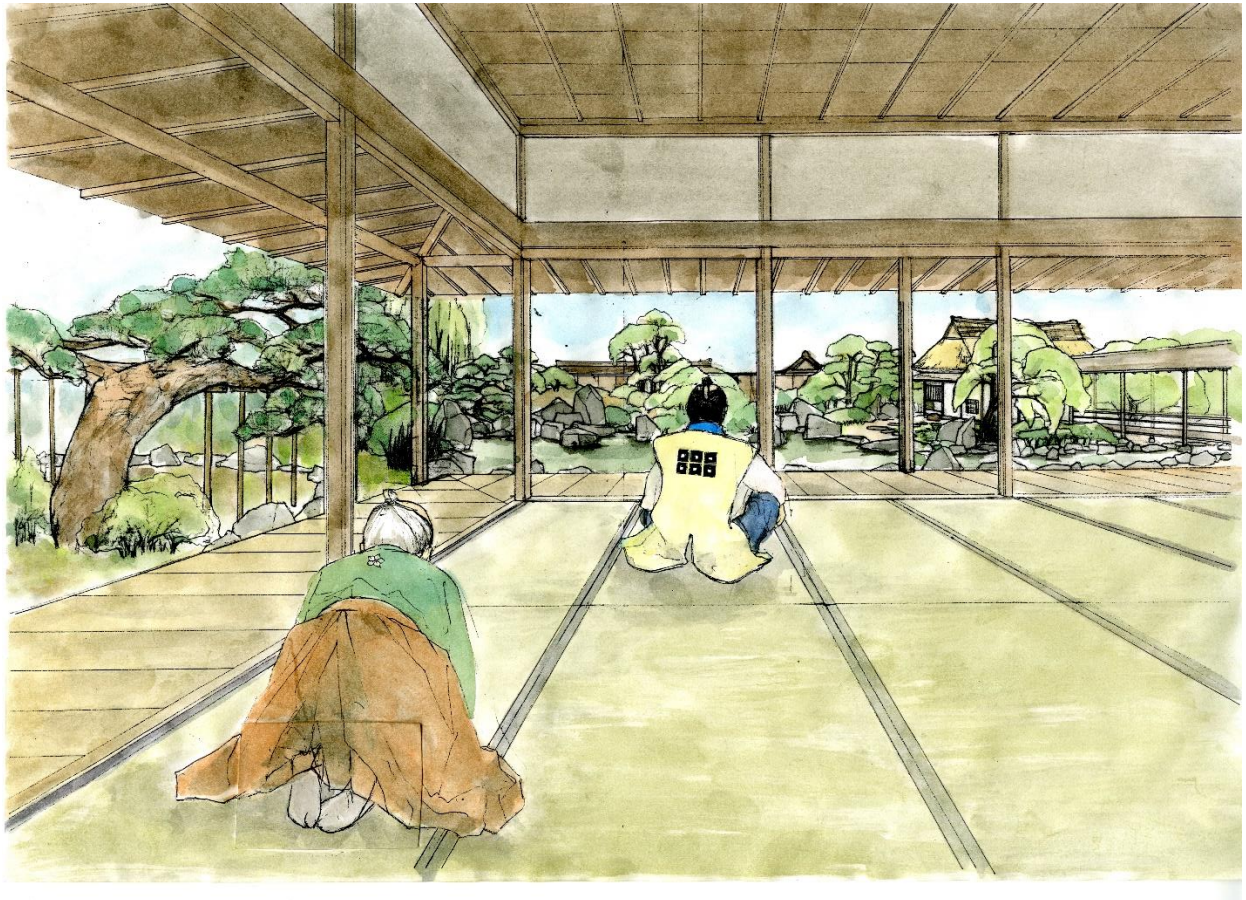


志野焼しのやま四方向付



北側の重臣屋敷地の江戸初期の遺構面（堀尾民部の屋敷地の庭園跡とみられる）

<松江歴史館敷地内の発掘調査状況>



重臣屋敷地内の邸宅から庭園を望むイメージ図

堀尾民部の屋敷に当時の松江藩主堀尾忠晴が訪れて、庭園を鑑賞したこともあったであろう。
 上の絵は、民部が茶室へ案内しようと客座敷で庭園を眺めて待つ藩主を迎えに上がる場面を描いたものである。